がん患者のセルフケア能力向上に向けた看護師の関わりの指針

中角吉伸(基礎看護学)

【キーワーズ】 がん予防，生活調整能力，認識，寛解状態，家族

本研究の目的は、がん組織とのせめぎ合いの中で、患者が治療とともに生活調整で回復力を高め、がんを寛解状態にもちこむための看護師の関わりの指針を得ることである。

研究対象は、がん病棟で腎臓がんの末期で化学療法を受けている患者に、看護師として関わった自己の看護過程である。

研究方法は、患者に良い変化が見られた場面を選定し、セルフケア能力の向上に意味があると思われた場面を再構成して、研究素材とする。各場面の意味を抽出し、研究目的に照らして分析し、看護師の認識の特徴から看護の指針を取り出す。

研究結果は、研究素材１事例７場面を分析して11の指針が得られた。それらの指針を、患者の状況および家族との関係性という観点から吟味し、関わり始め・治療中・退院に向けた時期の３つの時期と、家族への関わりの４つの項目に分け、以下の5つの指針を抽出する事が出来た。

関わり始めの時期の指針：

1　患者の対象特性を描いて関わり、よく観察して健康上の問題を探り、健康状態に合わせて実現可能な目標を描く。

治療中の指針：

2　患者が生活調整で回復力を高められるよう、患者のそれまでの日常生活を思い描いて個別性を受け入れながら、患者の状態に合わせて、実践・継続できる具体的な手段につなげていく。

退院に向けた時期の指針：

3　患者が、より健康な生活をつくり出せない時や、治療や生活調整の効果が実感できない時は、専門家として健康とのつながりが描けるよう根拠を示して、行動の変容や継続を促していく。

4　患者が、生活調整の一環として治療の場や手段を選択できるよう、専門家として助言や調整を行っていく。

家族への関わりの指針：

5　患者を、家族のなかでつくりつくられる存在として捉え、支える力を低下させないよう援助しながら、家族も含めて回復力を高める生活調整ができるよう具体的な手段をともに考える。

なお、この指針を適用するためには、看護師は、患者の生活者としての像をありありと描く能力、その生活をつくりだした患者や家族の認識に関心を注ぎ、健康な細胞を応援する生活調整のイメージを描けるような関わりを心がけ、がんとのせめぎ合いの中で寛解状態を主体的につくりだせるよう、あたまと技づくりに専門家として援助していくことが必要である、との結論を得た。